市外史跡見学会にて

宮崎雅美

快晴に恵まれた中で、吉野ケ里遺跡を歩んだ。

バスを降りると田手川に囲まれた集落が見える。

南内郭に向かう途中に、復元の逆茂木があった。櫓門に木製品の鳥が祀られていた。私はこの鳥に目を引かれた。当時、鳥は稲の精霊、鹿は土地の精霊として祀られていたという。吉野ケ里は稲作の発展に最も関わりが深かったのだろう。

少し離れてしまうが、兵庫県中北部に五世紀初頭（古墳時代中期前半）とされる池田古墳がある。此所で鳥形埴輪が多数発掘されている。親子の鳥形もある。発掘された鳥形モチーフは伝承的な関係を疑わせる。

南内郭は王や支配者が住んでいた所とされている。物見櫓からは、南に有明海を越え雲仙普賢岳（一、三五九メートル）が見える。東に吉野ケ里、西は神崎、北に墳丘墓が望まれる。西は倉と市が開かれていた場所でもあり、渡来・異国人などの交易の様子が映し出されてくる。この物見櫓からはこうした様子を東西南北に一望できる場所だ。

中のムラは、祭り・政治・儀礼などの道具を作る場所で、この隣に北内郭がある。まつりごとの場所で、此所に主祭殿がある。二階は北壁側に王、東壁側に吉野ケ里者、西壁側に交易者・客人、南壁に窓が備え付けられている。三階は北壁側に巫女、東壁側に通訳者、西壁側に伴奏者、南壁側に窓があり、窓はまつりごとの最中は閉め切られていたという。窓は南に位置し日当たり条件は良いのに、わざわざ暗くして使用したのは明暗を利用しての呪術により、最も有利な予言をしていたのではないだろうか。この主祭殿は、北東（鬼門の方角）は墳丘墓に、東西は冬至線に沿い造られていたという。知り見てみると驚かされた場所だった。

北墳丘墓には、歴代の王が埋葬されている。弥生時代中ごろ、紀元前一世紀のものとされている。真ん中の層の甕棺に銅剣を所持した人骨、両側が高い層になって甕棺に銅剣を所持した人骨、イモガイの腕輪を所持した人骨等が発掘された様子が見られた。層については埋葬されている人の身分の違い、区別の線といわれる。

甕棺は北部九州に特有な棺で、大型素焼の甕を合わせ口にしてその中に死体を入れて埋葬する。吉野ケ里でも合わせ口甕棺として使用されていた。これには亡くなった人の手足を折り曲げて入れているのが特徴。甕棺に手足を折り曲げて埋

葬すると頭部には圧迫感を回避させたかのように空間ができる。きっとこれは永遠に政治を共に考えている様子ではないだろうか。そんなことを思わせてくれる場所だった。

倉と市集落には倉庫群があり、市も開かれていた。当時、鉄の塊（鉄鉱石）を輸入していたようで製鉄の様子が窺われた。倉には米をはじめ織物・武器などが収納されていた。倉と市集落は南内郭の西に位置する。西という位置は吉野ヶ里外部者を意味する。東という位置は、吉野ヶ里田園の様子を思わせ吉野ヶ里者を意味する。主祭殿配置にも見られる様子は、位置支配の関係を強く根付かせていた場所なのだろう。いろいろおしえてくれた場所だった。

この地は景行天皇が、吉野ヶ里と名付けたと伝える。次のような感想が浮かんだ。

奈良県桜井市の纒向遺跡に景行天皇陵があるが、吉野ヶ里との関係は如何にか。景行天皇の子供であった日本武尊が支配したのか。成務天皇に敗れ家督を得られなかった日本武尊は、この地で想像を絶する権力を猛威にまで振るっていたのではないか。傲慢に外交をしていた日本武尊に脅威圧力があったのか。渡来人との交易・恋愛のためか。圧力か。渡来人との関係を考えると日本の立場を守るべきして時が進んだと納得できる。凄まじい権力を景行天皇も見ていただろうし、恐ろしく映ったのではないか。日本武尊の子供が、成務天皇の後の仲哀天皇となり神功皇后との間に応神天皇が生まれた。『憎まれっ子世に憚る』といまでもよく聞く。日本武尊伝説に由来していないのか。いろんな思いが浮かんできた。

先に述べた鳥の遺物は、纒向遺跡からも水鳥形木製品として出土している。おもしろいのは、吉野ヶ里は水鳥の造形であるのに対し、纒向は鳥の背が船形になっている。移り住む船に揺られ水鳥が船形になったのか。

最後に吉野ヶ里遺跡とは関係ないが、纒向遺跡から木製仮面が出土している。真っ平らの仮面は誰が見ても妙だったであろう。仮面に関わる何者かが蒜山に現れ幸を与えたのではないか。それは何故かと……蒜山にはスイートンという棒ぐらいの真っ直ぐな木に妙な妖怪を描いた木製品があり、今でも幸せを呼ぶとして祀られている。こんなのっぺらの妖怪が何で幸せを呼ぶのか。蒜山の地に森林を興したのか。奇妙さが何か一致してくるのは、幸せを呼ぶほどの地域開発をして伝承できる裕福な氏族が関わったから、と思われるからだ。

取り留めのない話になってしまったが、吉野ヶ里のさらなる研究の進展を、これからの発掘に期待したいと思う。